

富山県福岡町

埋蔵文化財分布調査報告Ⅲ

2005年3月
福岡町教育委員会

序

遺跡保護と開発行為は、地域の振興を図る上で車の両輪です。両者のバランスが崩れると、車はあらぬ方向へと進みます。土地の開発を行なう前にその場所が遺跡であるかどうか調べ、工事による遺跡の破壊を防ぐことが出来ない場合に発掘調査を実施し、遺跡を記録で保存する。私達が目にしている発掘調査の多くは、このような過程で行われています。そして、円滑に開発を行いながら遺跡の保護も十分に行われる。近年は、そんな調和のとれた関係が構築されつつあります。

今年度で5ヶ年計画の3年目を迎えた町内遺跡の詳細分布調査は、豊かな地域振興を実現する下地となるものです。埋蔵文化財の所在の確認は、文字通り文化財が地下に埋蔵されているため場所を特定することが困難です。しかしながら、田畠を踏査し、遺物を採集することで、おぼろげながらも遺跡の所在を知る手掛かりを得ることができます。そうした成果を反映した遺跡地図は、開発する側にとって遺跡の存在を認識するために重要な役割を担います。本書がその役割を担うことを願いますとともに、埋蔵文化財を活かした地域振興の一助となれば幸いです。

最後に、調査の実施にあたり御協力いただいた関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成17年3月

福岡町教育委員会

教育長 石田 伸也

例　　言

1. 本書は福岡町教育委員会が国庫補助を受けて実施している町内遺跡詳細分布調査の3年目（2004年度）の分布調査報告である。
2. 調査は福岡町教育委員会が主体となり実施した。
3. 調査事務局は福岡町教育委員会生涯学習課に置き、文化財保護主事栗山雅夫が調査事務を担当し、事務局長横山俊男が統括した。調査担当者は次のとおりである。

福岡町教育委員会 生涯学習課 文化財保護主事 栗山雅夫

4. 本書の編集・執筆・写真撮影は、福岡町教育委員会文化財保護主事栗山雅夫が担当した。
5. 本書の図版の遺物番号は実測図・写真図版ともに統一している。
6. 現地調査・資料整理・報告書作成にあたって、下記の参加を得た。

中田郁子

7. 採集遺物及び記録資料は、福岡町教育委員会が保管している。
8. 遺物の分類については、富山県文化振興財團 宮田進一氏のご教示を得た。記して謝意を表する。

目 次

序 文

例 言

目 次

第1章 はじめに

第1節 位置と地形 1

第2節 調査に至る経緯 1

第3節 2004年度調査地区的概要

I 地名各説 3

II これまでの遺跡調査成果 5

第2章 調査概要

第1節 調査の経緯 6

第2節 調査の成果

I 遺跡各説 7

II 小 結 14

写真図版

図版 1 航空写真(1)(小矢部一福岡)

図版 2 航空写真(2)(福岡一高岡)

図版 3 遺跡写真(1)

図版 4 遺跡写真(2)

図版 5 遺跡写真(3)

図版 6 遺跡写真(4)

図版 7 表採遺物 箔微写真(1)

図版 8 表採遺物 箔微写真(2)

図版目次

第1図 福岡町位置図 1

第2図 調査地区割図 2

第3図 2004年度分布調査対象地位置図 4

第4図 遺物実測図(1) 7

第5図 遺物実測図(2) 7

第6図 遺物実測図(3) 9

第7図 遺物実測図(4) 12

第8図 遺物実測図(5) 12

第9図 遺物実測図(6) 13

第10図 遺物実測図(7) 14

第11図 2004年度分布調査成果図 16

付 図 2004年度分布調査結果概要図

表 目 次

第1表 時代別採集遺物一覧 6

第2表 調査遺跡一覧 15

第1章 はじめに

第1節 位置と地形

福岡町は富山県の北西部に位置し、人口13,755人（平成17年3月現在）を数える。富山県は県のほぼ中央を南北に走る呉羽丘陵を境に東西に分け、それぞれ「呉東」地区・「呉西」地区と呼ばれることが多い。福岡町は呉西に含まれるが、市町村合併によって南砺市が発足したことから、1町で西砺波郡を構成している。行政区分でいえば、北から時計回りに氷見市・高岡市・砺波市・小矢部市に接しており、町の北西部は石川県と県境を接している。町の総面積は58.62km²あり、そのうち1/4を沖積平野、残る3/4を丘陵と山間地が占めている。平野部は南東に向かって広がる一方で、丘陵部は北西に向かって延び、平野と丘陵の境界付近には小矢部川が北東に向かって流れている。平野側にせり出した丘陵部分は、「西山丘陵」と呼ばれ、西の小矢部市と東の高岡市に連なっている。この西山丘陵の背後に広がる山間地は宝達山を主峰としながら、能登半島の山並みに続いている。

ところで、小矢部川は人口が集中する平野部を分割する役割を果たしており、福岡町内では「川西」地区と「川東」地区という俗称で認識されている。このうち「川東」地区は、散居村で有名な砺波平野の一角を占めている。一帯は、扇状地扇端部という地理特性によって地下水や涌き水が豊富で、圃場整備が行われる以前は、沼田が多くみられる場所であった。一方、今回の調査対象地である「西五位地区」が位置する「川西」は、小矢部川の流路の変化による影響を受けやすい場所に立地している。しかしながら、丘陵裾部に関していえば相対的に標高が高いこともあり、古くから集落が営まれていたことが遺跡の存在からも明らかとなっている。

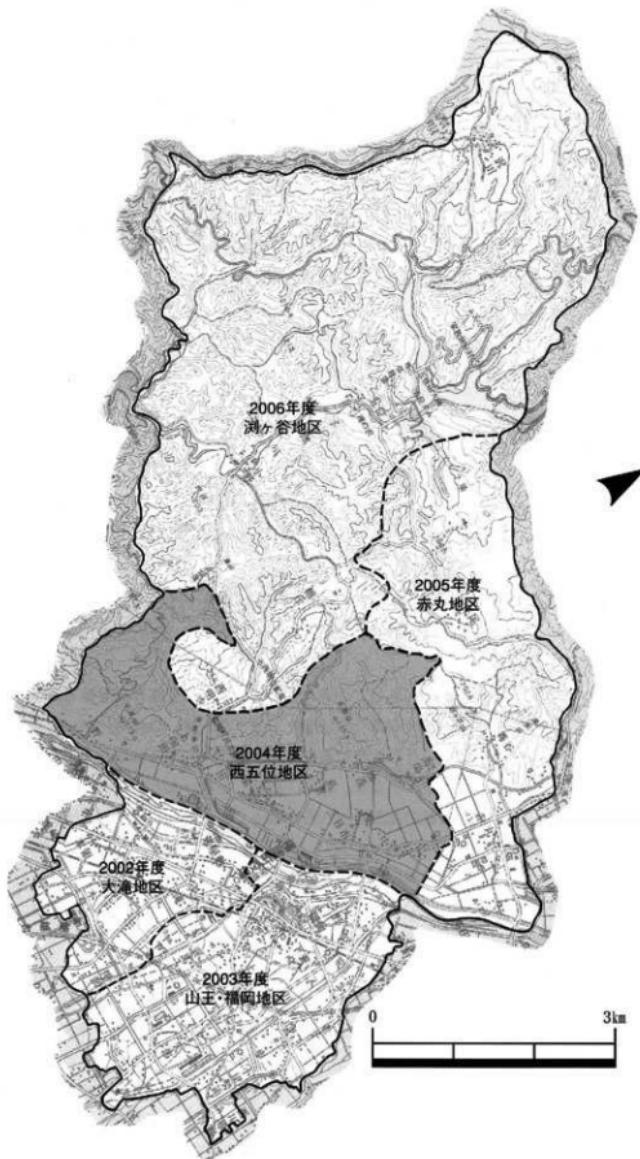


第1図 福岡町位置図

第2節 調査に至る経緯

福岡町内の埋蔵文化財包蔵地の周知化についていえば、富山県教育委員会文化課によって昭和47年（1972）に発行された『富山県遺跡地図』が底本となっている。平成5年（1993）、富山県埋蔵文化財センターが『富山県埋蔵文化財包蔵地地図』を発行したことから、以降はこの地図をベースに新たに判明した事柄を書き加え遺跡の把握に努めてきた。この間の遺跡数の変遷をみると、昭和47年で39箇所だったものが平成5年には87箇所に増加しており、平成5年以降に新規追加された遺跡を加えると、詳細分布調査着手以前には103箇所まで増加している。過去の詳細分布調査では新たに2箇所の新遺跡を確認しているが、分布調査に伴わない遺跡の発見も2箇所あり今回の調査成果をまとめる段階までに確認されていた遺跡は、107箇所となる。

詳細分布調査に伴う現地踏査は、遺跡位置の精度向上を図ると同時に以前の遺跡地図の不備を確認する意味で重要な作業である。また、開発事業に伴う遺跡照会の利便性を向上させる上からも高精度の遺跡地図は不可欠であり、全町を対象とする詳細分布調査を実施することとなった。



第2図 調査地区割図 (1/60,000)

第3節 2004年度調査地区の概要

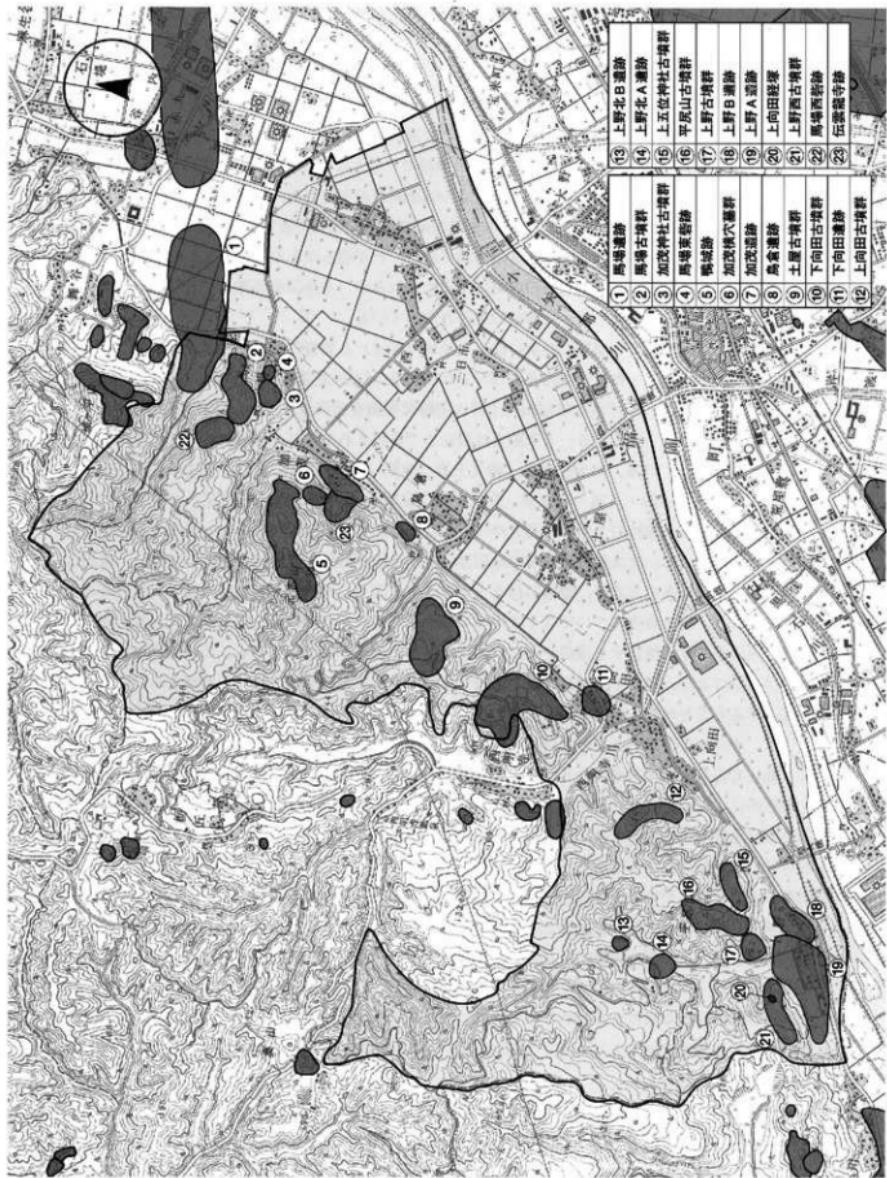
I 地名各説

今年度の調査対象地は旧西五位村にある。現在の自治会名でいえば、上野・上向田・下向田・土屋・鳥倉・加茂・馬場・西・三日市の9地区が該当する。明治22年の町村制施行時は、上田新村・竹山新村・上向田村・下向田村・藤岡新村・西村・鳥倉村・加茂村・馬場村に土屋村・三日市村・荒屋敷村・大滝村・土田新村のそれぞれ一部と上向田村他二か村の入会地をもって成立していた。

西五位村の名称は、鎌倉時代に荘園名としてみえる五位荘が関係するものとされ、江戸時代にみえる五位莊56カ村のうち、小矢部川西側一帯に成立した意味が付与されている。一帯は小矢部川左岸地区に位置しており、西側の丘陵と東側の小矢部川に挟まれた部分に沖積平野が細長く帯状に広がっている。その規模は、南北3.6km、東西5.4km、面積9.64km²を測り、南に旧子撫村・西に旧五位山村、北に旧赤丸村・東を旧福岡町・旧大滝村・旧荒川村と接している。

福岡町史によると、旧西五位村に關係する伝承として以下の事柄が紹介されている。(『福岡町史』福岡町史編纂委員会; 1969)

- ① 向田は、康平7年(1064)に源義家が越中守の時、家臣の向田行光に命じて開拓した場所で、当初は向田村であったが文禄2年(1593)の検地の際に上向田・下向田の2カ村に分かれた。
- ② 藤岡新は、向田家の家臣であった藤岡某が安政年間(1854~1859)に開拓したことになんでおり、竹山新は竹山と称する場所・上田新は慶応年間(1865~1868)に上田と称した場所を併せて開拓したことによる。
- ③ 上野は、上向田の上流にある原野であったことから命名された。
- ④ 土屋は、元取山の上から麓を見下ろすと、土の家が11戸見えたので十と一を組み合せて「土」屋という名前になった。
- ⑤ 鳥倉は、鴨城の登り口が鳥倉の地にあって、南北朝の争乱の際に南朝方の倉庫を建てようとしたが、北朝方に奪い取られたため「取倉」の地名がつき、それがいつの時代かに「鳥倉」と改められた。また、神社の祭祀を行なう諸費にあてる米穀を數か村から徴収し、この地に取り次ぎする倉を置いたことから「取倉」となり、後に「鳥倉」となったという伝承もある。
- ⑥ 加茂は、建武2年(1335)に京都の加茂神社へ馬を献上し、上加茂社と下加茂社が勅造された。また、南北朝期には鴨城が存在しており、既に「加茂」「鴨」と呼ばれていたらしい。後に高畠村と改名されたが同名の村が砺波に存在していたので、明治8年に話し合いで加茂村とした。
- ⑦ 馬場は、城ヶ平山に城が築かれていた頃に、馬の調教に使われたことからその名が生じた。
- ⑧ 三日市は、古くから開発を受けた土地で、小矢部川近辺の交通の要地を占めていたことから米蔵もあって、三のつく日に市が開かれていたのでこの名がついたらしい。
- ⑨ 西は、三日市の西の方にある集落のため西村となった。
- ⑩ 承元3年(1209)3月18日、親鸞聖人が越後国に流罪される途中、俱梨伽羅峰の「猿が馬場」の難所で足を痛められた。加えて、連日の降雨によって小矢部川が氾濫し、大洪水となり交通網が断絶した。このため、田丸の浦、向田村の村民であった善四郎の居宅に宿をとったと伝えられており、上向田の淨永寺境内には「高祖聖人旧跡」と記した石碑が残されている。集落を通る小矢部川に掛かる橋を「聖人橋」、集落西方の山を平尻山「ひじりやま」と呼んでいる。



第3図 2004年度 分布調査対象位置図 (1/25,000)

II これまでの遺跡調査成果

西五位地区でこれまでに確認されている周知の埋蔵文化財包蔵地は、23遺跡を数える。このうち、約半数にあたる10遺跡は古墳群と横穴墓群が占め、3遺跡が中世の城館遺跡である。発掘調査が実施された遺跡は「上野A遺跡」「下向田古墳群」の2遺跡で、ともに2次にわたる調査が実施されている。

下向田古墳群は、町民公園と靈園の整備に先立ち試掘調査が実施され、1次調査の成果は概報として刊行されている（「富山県福岡町下向田古墳群試掘調査概報」福岡町教育委員会；1985）。調査の結果、当初15基と推定された古墳の内、1基は古墳でないことが明らかとなった。これらは、円墳と方墳で構成されることから古墳時代後期の群集墳と考えられるが、主体部を発掘しておらず詳細は明らかでない。1次調査の終了後には、町指定の史跡となっている。

上野A遺跡は、車庫・農作業場の建築に伴う小規模（50m²）な調査と町道上野西線の道路改良工事に伴う調査が実施され、それぞれ報告書が刊行されている（「富山県福岡町上野A遺跡発掘調査概要」福岡町教育委員会；1992）（「富山県福岡町上野A遺跡発掘調査報告Ⅰ」栗山；2003）。遺跡は、小矢部川に面した河岸段丘上に広がる。1次調査は段丘上で実施されており、地床炉と貯蔵穴を伴う堅穴住居が1棟確認されている。出土遺物は、縄文土器（前期・中期）・磨製石器・くぼみ石・石錘・石匙・石槍・ナイフ状石器・石屑・炭化果・弥生土器（後期）・須恵器（9～10世紀）が整理箱にして8箱分出土している。遺物の主体は、縄文時代前期にあり前期中葉から後葉の窓ヶ森Ⅱ式と福浦上層式が多く占めている。2次調査は遺跡の縁辺部にあたる段丘裾部を調査対象地としており、検出した遺構は溝と流路のみであるが、遺構に伴う土器片が多く出土している。土器型式は1次調査時のもとの近似するが、窓ヶ森式についてはⅠ式が多く出土しており、石器の出土量も考えると若干様相が異なる。泥炭層が厚く堆積する流路からは、漆を塗った上器片が出土している。この土器片は、漆塗膜の科学分析により、県内で2番目の古さを持つ漆製品であるとともに土器塗装事例としては県内最古のものであることが明らかとなった。また、種実遺体の同定を行なうために泥炭層の土壤を洗浄したところ、オニグルミやトチ等の食用種実が多く含まれており、低湿地の植物利用が想定されている。

この他にも正式な発掘調査がなされたわけではないが、「加茂横穴墓群」「上向田経塚」では遺跡の内容を明らかにする遺物が掘り出されている。

加茂横穴墓群は、県指定史跡「城ヶ平横穴古墳」と同時期に発見され、出土品の写真には「明治41年3月22日加茂村に於いて発掘分」と記録されている。人骨・刀剣・玉類・須恵器等の出土品は、6世紀末～7世紀前半が中心年代になるものである。26基を数える横穴墓の遺存状況は、比較的良好なものが多く、平成12年に町指定史跡となっている。

上向田経塚は、上野西古墳群内に立地する経塚で昭和35年頃に地元住民によって、町の指定文化財である「珠洲焼 刻銘経外容器」が掘り出されている。『オジャラ』第2号には、西井龍儀によって出土時の状況等詳細な報告がまとめられている。経塚の墳丘規模は、直径約12m、高さ約2mで円墳状の高まりをもつ盛土を有している。経筒の外面にはヘラ書きによって「きよわらたけこい（又はひ）」と線刻されている。

なお、丘陵内の古墳群については、前述した西井氏によって精力的な分布調査が実施されている。同様に、城館遺跡についても高岡徹氏による縄張り調査が実施されており、その成果は「福岡町中世城館調査報告書」（福岡町教育委員会；2003）として刊行しているため、本報告書では両者の調査成果を最大限に盛り込んでいる。

第2章 調査概要

第1節 調査の経過

調査は、過去2カ年と同様に耕作期間を除く時期に現地踏査を実施した。調査体制は、調査員と調査補助員の2名で調査対象地全域の田畠を踏査し、その手法は下記で示す方法を原則としている。

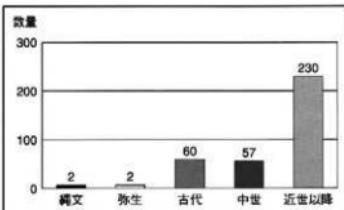
- ① 遺物の集計は、田畠区画の大小によらずに1枚の田畠を最小単位とする。
- ② 踏査の基本動線は、1区画の田畠の外縁部分を1周するものとする。但し、圃場整備等によつて通常区画数枚分に及ぶ大きさを持つ水田は、必要に応じて縦断するラインを設ける。
- ③ 遺物整理の単位は、田畠1区画とする。
- ④ これまでに分布調査を実施している箇所については、過去のデータを採用することとする。

この調査方針は、踏査者が多勢になって、個人レベルの遺物採集能力の誤差によって生じる調査精度の誤差を少なくすることと調査費の高騰を抑えることを目指している。田畠外縁を1周する踏査動線については、分布調査による遺物採集区域が田畠の外周に集まる傾向と、水田外周に排水目的の溝を設けている水田が多く見られることから、排水溝を設けるために掘り起こした土を確認することが効果的であると考えて採用している。なお、2人体制としているのは、前述した遺物採集精度誤差と調査費の問題だけでなく、担当者ができるだけ広い土地を歩くことで、調査地の立地環境を体で理解することも目的としている。

遺物の整理については、旧石器・縄文・弥生・古墳・古代・中世・近世以降の時期に分類して整理を行なうこととし、各時期に帰属させた遺物の採集地点を1/2,500の地図上に落として、周知の埋蔵文化財包蔵地として扱う遺跡の範囲を検討した。遺跡範囲決定については、中世以前の遺物採集地点を中心とし、近世以降の遺物の散布状況は参考程度とした。こうした遺物散布を示すドットのまとまり具合に加えて、田地形や小字の分布状況を検討することで遺跡範囲を絞り込んでいる。

現地踏査は実働にして14日を費やした。踏査によって遺物を採集した田畠は203枚を数える。内訳は縄文が2点、弥生が2点、古代60点、中世57点、近世以降が230点で総数351点となる。但し、素焼きの土器については、表面採集という条件のために摩滅した小破片が多く、古墳時代の土師器を識別することが困難であった。したがって、縄文・中世・近世を除く素焼きの土器については、周辺で採集した遺物の年代と齟齬をきたさない時期となるように、弥生と古代のどちらかに帰属させていることを断っておく。

数量比をみると、古代と中世の遺物がほぼ同数となっており、本地区の遺跡主体がこの時代にあることを示唆しているものと考えられる。なお、縄文時代の遺物が少ない点については、縄文集落である上野A・B遺跡内の大部分が既に宅地化しているため調査対象となる田畠が少なかったことに起因している。



第2節 調査の成果

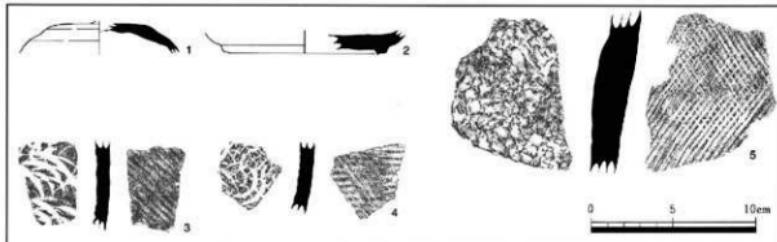
I 遺跡各説

①馬場遺跡（遺跡番号 422049）：範囲変更

福岡町馬場地内の谷間から赤丸地内の平野部分にかけて広がっている。平成9年には、谷奥にあたる遺跡西端部で工場建設に伴う試掘調査を実施しているが、保護措置を要する遺構や遺物は確認されていない。調査以前と比較すると遺跡西側部分が縮小し、東西約200m南北約100mを測る。ただし、赤丸地内については来年度の調査対象地であるため、範囲変更是馬場地内の変更にとどまる。

『越中志微』によれば、馬場村に「吉岡谷」と呼ぶ谷があり、そこには「吉岡庄地頭館址」があつたとされている。また、文治3年（1187）の記録として、館の主と考えられる吉岡成佐の名が残されており、「五位庄」以前には、「吉岡庄」と呼ばれていたことが伝承されている。本遺跡の谷付近の小字をみると「吉岡」の名が残されている。さらに、谷自体を「吉岡谷」と呼んでいることから考えると、中世の遺跡が存在している可能性が高い。

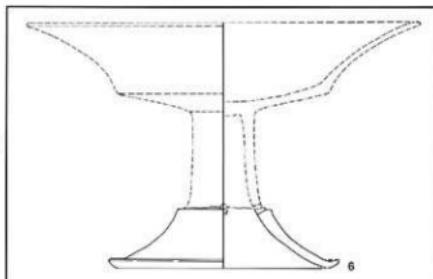
採集遺物は、古代11点と近世1点で計12点となる。このうち古代土師器は細片のため図示できないが、1、2で図示する須恵器の杯蓋と杯身は8世紀代におさまる時期のものであり、同時期のものと想定している。なお、遺物は遺跡東側の畑部分を中心に散布しており、5の須恵器壺の体部は断面をカットした丘陵裾で採集している。



第4図 遺物実測図(1) (1/3)

②馬場古墳群（遺跡番号 422050）：範囲変更

馬場遺跡西側にある丘陵の尾根沿いにあり、これまでの調査によって円墳を中心にして計18基の古墳が確認されている。平成17年には、長径約11m、短径約9m、高さ1.5～2mを測る1号墳の区画溝の風倒木から、弥生時代終末期の月影I式に相当する高杯か器台の有段脚部と壺の体部が出土しており、墳墓に伴うものとすれば県内最古段階の墳丘墓となる可能性がある。遺跡の範囲変更是、確認されている古墳の分布に合わせ標高を基準線として括り直した。



第5図 遺物実測図(2) (1/3)
※西井龍儀氏作成原図を再トレース

③馬場古墳群（遺跡番号 422051）：範囲変更

馬場古墳群と浅い谷を挟んだ南側に位置している。これまでに、6m～16mの径をもつ円墳が5基確認されている。尾根を東に下っていくと、空掘を挟んで馬場東砦が築かれている。遺跡の範囲変更是、確認されている古墳の分布に合わせて、標高を基準線として括り直した。

④馬場東砦跡（遺跡番号 422052）：範囲変更

馬場集落の背後にある標高64mを測る尾根先端部に遺構が配置されている。築城の時期は、南北朝から戦国時代前期に築かれたものと推測されているが、大規模な空掘と虎口の形態から戦国後期の16世紀後半まで下る時期も想定されている。遺跡範囲の変更是、数度に及ぶ縄張り調査成果に基づいて、郭と堀切の配置を反映したものに修正した。

⑤鶴城跡（遺跡番号 422053）：範囲変更

加茂集落の背後にある標高150m余りの山上を中心に遺構が配置されている。主郭を擁する山上は、切岸と空堀によって防御を固める造りとなっている。また、尾根筋を伝って、東と西には出丸・物見台に相当する郭が設けられており、それぞれ「ねらみ山砦」、「元取山砦」と呼ばれている。中でも、元取山砦は標高195.8mの元取山山頂にあって砺波平野を一望できる。

築城時期は、文献史料と遺構の形状から南北朝期に築城され、その後16世紀代にも改修して使用していたものと考えられている。遺跡範囲は、縄張り図に基づいて変更したが、その際には山上と尾根筋に展開する遺構の所在を押さえた上で等高線の形状を加味しながら修正した。

⑥加茂横穴墓群（遺跡番号 422054）：範囲変更

この横穴墓群は、これまでの調査で26基の横穴墓の存在が確認されている。砂岩質の岩盤を掘りこんで築かれているため、いくつかの横穴墓は崩落・埋没した状態にある。

古写真等から明治41年に赤丸の城ヶ平山にある県指定史跡「城が平横穴古墳」と同時期に遺物が掘り出されたことが明らかとなっている。明治以降、長年にわたって手付かずのままであったことも幸いして、遺存状態は城が平山の横穴墓より良く、平成12年には町指定史跡となっている。遺跡範囲は、指定前に実施した所在確認調査成果に基づいて、位置を修正した。

⑦加茂遺跡（遺跡番号 422055）：範囲変更

遺跡一帯は加茂集落の後背地にあって、畑や菅原として利用されている。調査前まで加茂遺跡は時代不明の散布地とされていたが、遺跡の背後にあり、通称「袋谷」から流れ出る谷川からは、古代と中世の遺物が頻繁に採取されている。この「袋谷」内には雲龍寺と呼ばれる寺院があったとされ、伝雲龍寺跡という中世寺院遺跡を谷間に設定している。

分布調査では、古代3点、中世1点、近世以降1点の遺物を採集した。範囲変更に伴う新たな遺跡範囲は、南北約150m、東西約100mとなる。遺跡内は、谷川の浸食と堆積が繰り返されていて、比較的高低差に富む地形となっている。低地部分では、水害が悪いこともあり、菅原が営まれている。遺物は、古代須恵器・土師器と中世土師器、越中瀬戸擂鉢を高地にあたる畑で採集した。

⑧鳥倉遺跡（遺跡番号 422056）：範囲変更

畑として利用されているが遺物は採集されなかった。この遺跡についても、加茂遺跡と同様に時代不明の散布地となっており、詳細は明らかではない。ただし、立地状況をみると、丘陵部部分を切り開いており、遺跡が存在する可能性は捨てきれず、現地の耕作地境を参考に遺跡範囲を括った。

⑨土屋古墳群（遺跡番号 422057）：範囲変更

本遺跡は、上屋地内の山中、標高約130mの丘陵上に分布している。これまでに11基の円墳が確認されている。このうち1号墳は直径が約30mを測り、福岡町内では最大規模を誇る円墳である。遺跡の範囲変更是、確認されている古墳の分布に合わせて、標高を基準線として括り直した。

⑩下向田古墳群（遺跡番号 422058）：範囲変更

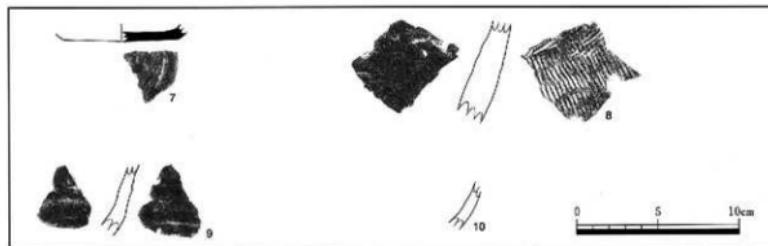
第1章第3節でも記したように、この古墳群はこれまで2度にわたる試掘調査が実施されている。これまでの調査によって、14基の円墳と方墳が確認されている。最も大きい2号墳は長軸26m、短軸23mの規模をもつ方墳で「塚山」の名が伝承されている。昭和60年には町指定史跡となっており、案内看板や遊歩道が設けられている。遺跡の範囲変更是、確認されている古墳の分布に合わせて、標高を基準線として括り直した。

⑪下向田遺跡（遺跡番号 422059）：範囲変更

調査前は中世の散布地として登録されていたが、分布調査では遺物の散布が認められなかった。しかししながら、元の遺跡位置から道路を挟んで50m程西の地点で古代・中世遺物の散布が認められたことから、遺跡の位置を変更した。

新たな遺跡の範囲は、北西-南東約330m、東北-西南約110mとなる。採集遺物は、古代2点、中世8点、近世以降1点であり調査前に登録していた遺跡内容と矛盾しない結果となっている。その内容は古代では須恵器杯身と土師器、中世では珠洲焼、青磁、中世土師器である。

なお、「越中志微」には「佐藤若狭館跡」が下向田村にあったとされているが、その詳細は明らかでない。ただし、青磁を採集していることから、関連については今後の検討課題としておきたい。



第6図 遺物実測図(3)(1/3)

⑫上向田古墳群（遺跡番号 422061）：範囲変更

上向田集落背後の丘陵内にあって、これまでに4基の古墳が確認されている。いずれも10m前後の

直径を持ち、墳丘の高さが1.0～1.5mを測る。山墳の位置を標高で分けると、2つのグループにわかれ、1つは標高105m付近で2基、もう1方は標高80m付近で2基確認されている。遺跡の範囲変更是、確認されている古墳の分布に合わせて、標高を基準線として括り直した。

⑪上野北B遺跡（遺跡番号422062）：範囲変更

上野集落背後にある開析谷の最奥に位置する遺跡である。遺跡は縄文時代の散布地とされているが、山林がその範囲であるため、踏査対象からは除外されている。しかし周辺を調査したところ、遺跡の立地場所として西側の谷あいが適しているものと考えられたので若干位置を変更した。

⑫上野北A遺跡（遺跡番号422063）：範囲変更

上野北B遺跡から200m程南の谷下流部に位置している。調査前は、丘陵部分まで遺跡範囲となっていたが、丘陵部分の耕作地では遺物の散布が認められず、また水田部分でも遺物は採集されなかつた。縄文時代の散布地として登録されているため、遺跡の中心と考えられる耕作地を境界として遺跡範囲を括った。

⑬上五位神社古墳群（遺跡番号422064）：範囲変更

上向田に所在する上五位神社背後の丘陵内にあって、直径7～12mの円墳6基がこれまでに確認されている。標高75m付近に4基が集合し、5号墳と6号墳は東と西に100m程離れて立地している。遺跡の範囲変更是、確認されている古墳の分布に合わせて、標高を基準線として括り直した。

⑭平尻山古墳群（遺跡番号422065）：範囲変更

平尻山山頂から麓にかけて古墳群が広がっている。上五位神社古墳群とは浅い谷を挟んで西側に位置し、これまでに15基の古墳が確認されており、直径10m未満、墳丘の高さ1m未満の小規模な古墳が分布している。古墳のまとめをみると、標高50m付近で4基、標高80m付近で6基、標高100m近辺で5基の3群にわけることができる。遺跡の範囲変更是、確認されている古墳の分布に合わせて、標高を基準線として括り直した。

⑮上野古墳群（遺跡番号422066）：範囲変更

平尻山古墳群の南西にあって、標高40m付近で5基、標高50m付近で2基の計7基の古墳が確認されている。このうち、直径15m、墳丘の高さ2mと最大規模をもつ3号墳からは、1956年に行なわれた鉄塔工事の際、5世紀中～末の須恵器破片や石製紡錘車が出土している。また、1号墳が削平を受けている部分（約2/5破壊）では須恵器や土師器の破片が見つかっている。遺跡の範囲変更是、確認されている古墳の分布に合わせて、標高を基準線として括り直した。

⑯上野B遺跡（遺跡番号422067）：範囲変更

上野集落のある河岸段丘上の東側にひろがっている。町道を境として東側は上野A遺跡と接している。縄文時代前期・中期の遺跡で種別は散布地とされている。遺跡の大部分が宅地と植林された山林で覆われており、分布調査対象となる耕作地はほとんど存在していない。このため、遺物を採集する

ことはできなかったが、遺跡としては存在することが確実であり、河岸段丘を境界に遺跡範囲を括り直した。

⑩上野A遺跡（遺跡番号 422068）：範囲変更

上野B遺跡の西側にひろがっており、平成元年には段丘上で、平成13年には段丘下を対象に発掘調査を実施している。調査の成果については、第1章第3節を御覧いただきたい。遺跡の中心年代は縄文時代の前則後葉にあり、蟻ヶ森式～福油上層式に比定される土器群が多く出土している。これまでに検出された住居跡は1棟だけであるが、立地環境から考えると集落遺跡であることは確実である。

分布調査によって採集した遺物は、古代4点、近世以降13点であり、本遺跡の主要時代である縄文遺物は採集していない。古代の遺物は須恵器のみで、近世以降の遺物は土師質の土器が1箇所に集中していた。調査前に遺跡北側の谷部分まで広がっていた箇所については、遺跡縁辺部にあたる平成13年度調査区の成果を参考にすると、段丘上で遺跡の境界を区切ることが妥当であると考えられることから、全体の範囲は縮小する結果となっている。

⑪上向田経塚（遺跡番号 422069）：変更無し

上野西古墳群内にある経塚で、直径約12m、盛土の高さが2mを測る。1960年には、町指定文化財となっている「珠洲焼 刻銘経外容器」のほか、刀子4口と銅製品が発見された。経筒は、川原石の積み石に囲まれて出土したが、経筒内に遺物は埋納されていなかったと報告されている。経筒は、12世紀後半～13世紀前半の年代が与えられ、経塚の築造時期を探る上で貴重な資料である。残念ながら埋納部分は破損を受けたが、塚の高まりは出土時のまま残されており、現在でも積み石や発掘時の土坑をみることができる。

⑫上野西古墳群（遺跡番号 422070）：範囲変更

上野集落背後の丘陵上にあって、これまでに13基の古墳が確認されている。また、上向田経塚はこの古墳群内に所在している。大きく2群にわかれる古墳の分布状況をみると、標高40～80mにかけて11基の古墳が東の開析谷に向かう尾根上にズラリと並ぶ一群と、標高90mほどの高まりを境として、東側の標高80m付近の平坦部に2基の古墳が築かれている。このうち経塚は、前者の群に立地している。遺跡の範囲変更是、確認されている古墳の分布に合わせて、標高を基準線として括り直した。

⑬馬場西砦跡（遺跡番号 422086）：範囲変更

谷を挟んで北を赤丸城、南を鶴城によって挟まれた標高127mの山上一帯に築かれている。2つの郭の間には上幅7.8m深さ2.3mの堀切が設けられている。この砦から馬場集落に向かって尾根づたいに南東に下ると、馬場古墳群・加茂神社古墳群があり、先端に馬場東砦が存在している。

築城時期については、南北朝～戦国前期とみる考え方と、16世紀後半とする説があるが文献史料が残されていないため詳細は不明である。この砦と馬場東砦の関係については、地形から同一勢力による城とみる説と縄張りの解釈から別勢力の城とする考え方があり築城時期と合わせて今後の検討課題である。遺跡範囲の変更是、数度に及ぶ縄張り調査成果に基づいて、郭と堀切の配置を反映したものに修正した。

②伝雲龍寺跡（遺跡番号422100）：変更無し

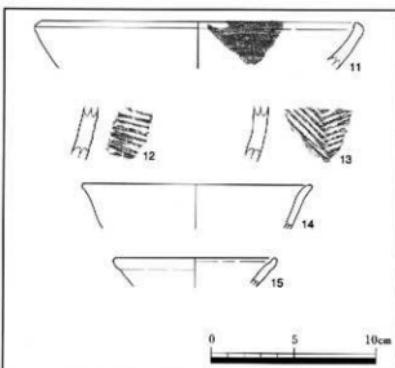
加茂集落背後の通称「袋谷」と呼ばれる谷間に位置する。この谷間から流れ出る谷川からは、大雨のたびに遺物が流れ出でており、地元住民によって遺物が採集されている。また、平成11年には、地元自治会の草刈り時に、明和5年（1768）に建立した雲龍寺開山の以州順永の供養塔が発見されている。「越中志微」によると、「雲龍寺址」の項で「…其遺跡は三日市村の山手にて、今雲龍寺谷と呼べり。開山以州和尚の墳墓あり。以州和尚は、永正16年5月26日遷化なりと云う。」と記している。この墳墓は前記の供養塔を指すものと思われ、明治時代まで存在していたものが、土砂崩れによって埋没していたと考えられる。現在、雲龍寺は金沢市に移転しているが、同寺の由来書等によると、15世紀中頃に武藏国龍淵寺の以州和尚を招いて建立され、その後慶長年間に金沢へ移転したと記している。

採集された遺物をみると、古代～近世末の遺物があるが中世遺物が全体の9割を占めている。中世遺物の6割程度を占めるかわらけによると、15～16世紀代、18末～19世紀の2時期でまとまりをもっており、寺院建立時期と供養塔建立時期を示しているものと考えられる。

③三日市西遺跡（遺跡番号422108）：新規

三日市集落の西に設定した新規の遺跡で南北約250m、東西約300mがその範囲となる。遺跡の立地は、圃場整備が完了している水田地帯で小矢部川に近い沖積平地である。採集した遺物は、古代1点、中世8点、近世以降24点の計33点である。古代は須恵器1点、中世は、珠洲焼4点、中世土師器3点と青磁1点を採集している。14の青磁は14～15世紀の無文碗である。珠洲焼壺か甕の叩きには、平行叩きと綾杉叩きのものがある。

遺跡の区域は逆L字形となるが、これは遺跡が隣接する三日市と西の2つの集落に接する部分で遺物を採集していることによる。

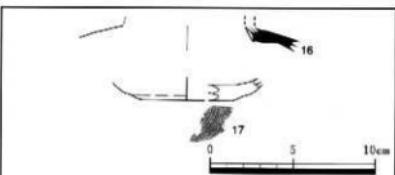


第7図 遺物実測図(4)(1/3)

④加茂浅畠遺跡（遺跡番号422109）：新規

新規の遺跡で北西～南東220m、東北～西南約25mがその範囲となる。遺跡は加茂集落と馬場集落の間に位置する谷間の北東一帯にあり、加茂神社の北西に位置する。遺跡背後の丘陵上には、加茂神社古墳群・馬場東古墳跡・馬場西古墳跡・馬場古墳群が所在している。遺跡名称は、周辺の小字が「浅畠」であることによる。遺跡の現況は畠と墓地で、家と丘陵の狭間にあたる細長い平坦面をその範囲とした。

分布調査では、古代遺物6点を住宅背後の畠で採集したが、以前に、墓地付近で珠洲焼を探



第8図 遺物実測図(5)(1/3)

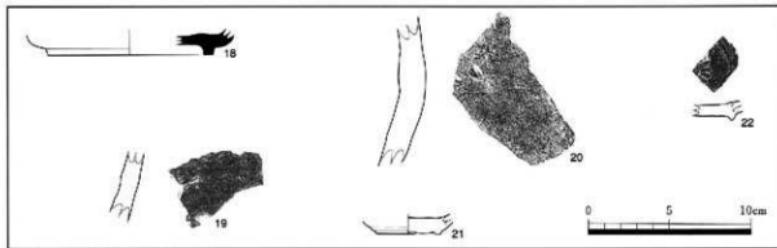
集しているため、そこまでを遺跡範囲とした。古代遺物は、須恵器杯の蓋と身、16の瓶類頸部、17の糸切り底を持つ上師器碗を採集した。

⑩ 加茂ねらみ山古墳群（遺跡番号 422110）：新規

加茂集落の背後にある鴨城跡と重なり、ねらみ山砦と呼ばれる出丸に相当する部分から鴨城に取り付く尾根上の標高130m～140m付近で2基、そこから加茂横穴墓群にかけて南に下る尾根上の標高90m付近で2基と2群に分かれる古墳群が確認された。このうち、標高130m付近にある1号墳は、ちょうどねらみ山砦部分に相当しており径約22m、墳丘高さ約3mの円墳である。また、標高140mにある2号墳は、後円部幅約15m、前方部幅約8m、全長約34mの前方後円墳と考えられている。3・4号墳は、尾根を溝で区画するように立地しており、7×7.5m、8×7mの方墳で墳丘の高さは約1.5mとなる。

⑪ 鳥倉御玉田遺跡（遺跡番号 422111）：新規

新規の遺跡で北東～南西約320m、西北～東南約200mがその範囲となる。遺跡は鳥倉集落東側の水田に位置し、三日市西遺跡と同様の立地環境となる。遺跡名称は、周辺の小字が「御玉田」であることによる。分布調査では、古代遺物3点、中世遺物7点、近世以降11点を採集した。散布傾向をみると、南側の水田に中世遺物が集まり、農道を挟んで北側の水田で古代遺物がまとまる結果となった。農道を挟んでもう1区画南の水田でも中世遺物を採集しているが、まとまりがみられるものではなかったため、遺跡外とした。古代遺物では18の須恵器杯身や蓋、中世遺物では、19の珠洲焼・20の越前焼、近世以降では21・22の越中漬戸や肥前陶磁がみられる。時期を特定できる部位を採集していないが、中世に関していえば珠洲と越前の混在から15～16世紀頃の遺跡であると推定できる。

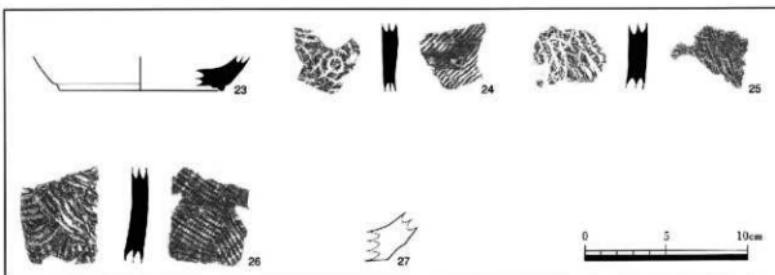


第9図 遺物実測図(6)(1/3)

⑫ 下向田東遺跡（遺跡番号 422112）：新規

新規の遺跡で南北約320m、東西約170mがその範囲となる。遺跡は下向田集落と土屋集落の間に広がっており、三日市西遺跡、鳥倉御玉田遺跡と同じ立地環境である。採集された遺物は、北側に集まる傾向がみられ、古代9点、中世2点、近世以降3点の計14点である。古代は23～26のような壺の高台部分や同心円のタタキ整形を内面に施す蓋などの須恵器を中心採集した。中世では27の珠洲焼鉢底付近と15世紀頃の雷文帯をもつ青磁、近世以降のものとして越中漬戸の皿や肥前外青磁の染付が

ある。



第10図 遺物実測図(7)(1/3)

II 小 結

今年度の調査によって、新たに5つの新規遺跡を発見した。二ヵ年に及ぶ「川東」地区での分布調査の結果、新発見遺跡が2遺跡であったことを考慮すれば、今年度の新発見遺跡は多いということになる。これは、町内における開発行為が「川東」地区を中心として実施されることが多く、その結果として遺跡を調査する機会が多かったことに起因しているものと考えられよう。従って、本年を含め三年かけて調査を実施する「川西」地区と山間部の「五位山」地区では、未だ確認されていない遺跡が眠っている可能性が高い。

今年度の調査について特記すべき事項を挙げるとすれば、第1表と付図で示したように古代遺物の散布を広く確認したことといえる。当地区には古代の北陸道として比定されることが多い「山根往来」が存在しているにもかかわらず、調査前までに確認されていた古代の遺跡は馬場遺跡（散布地）だけであったが調査の結果、新たに7遺跡で古代の遺物を採集することができた。さらに、採集遺物分布状況から、遺跡としなかった場所においても古代遺物が点在するデータを得ることができた。当地区における古代の様相については、今回の分布調査成果によってその解明に至る具体的な手掛かりをつかむことができたと評価できよう。

加えて、これまでに西井龍儀氏、高岡徹氏らによって精力的な調査が行なわれてきた西山丘陵における古墳群や山城の分布状況についても、その成果を盛り込むことができた。これまでの埋蔵文化財包蔵地図が1/25,000ということもあって、この種の遺跡についてはその範囲を表現しきれていない部分もあったが、今回の調査報告書によって精度の高い遺跡範囲を提示することができたことは大きな成果といえる。また、山城の存在と呼応するように中世遺物が古代遺物と拮抗する数量比で採集された点についても、今後注目しておくべき点として挙げておきたい。

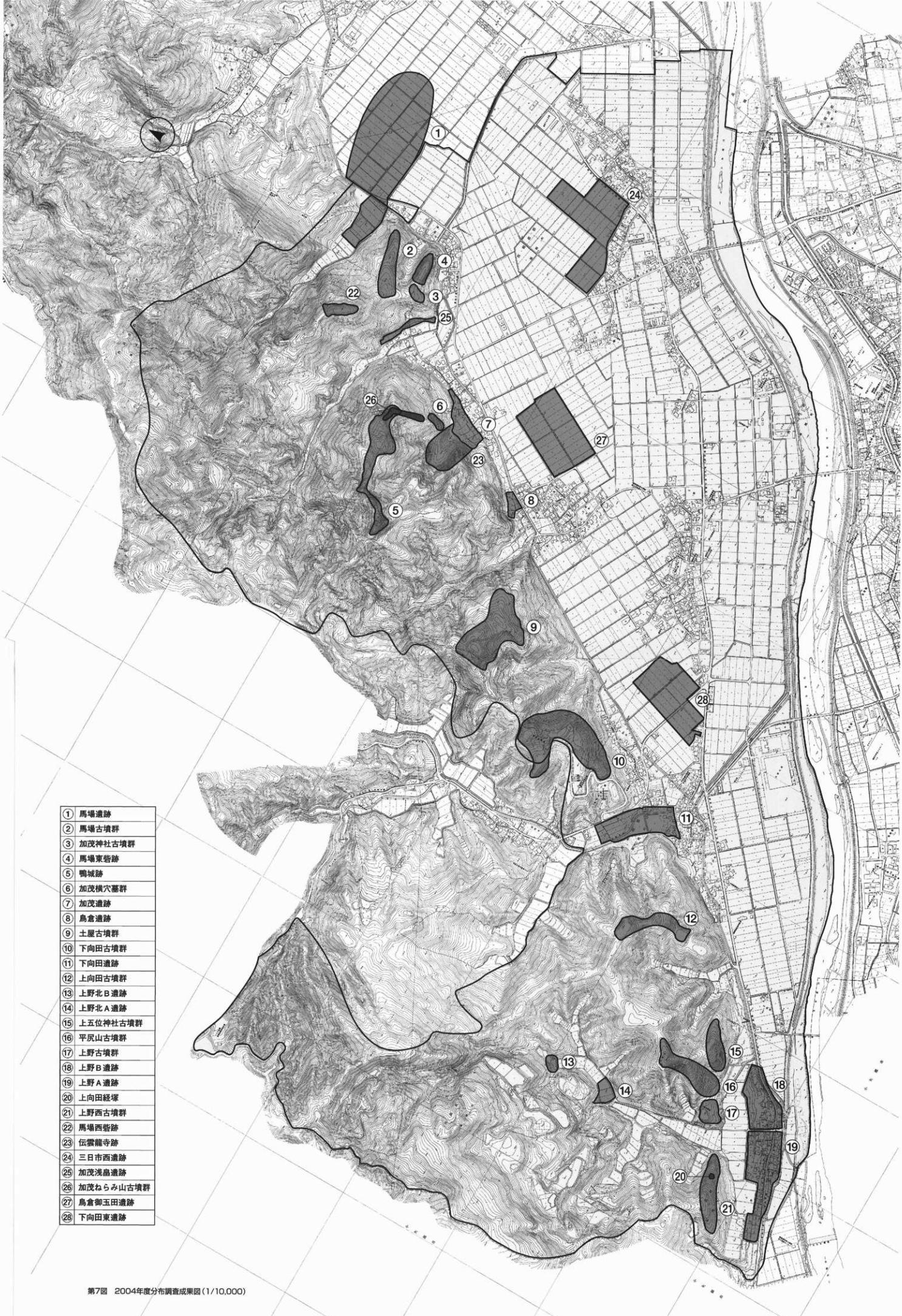
第2表 調査遺跡一覧

遺跡番号	名 称	所 在 地	種 別	時 代	現 況	備 考
① 422049	馬場遺跡	福岡町馬場	散布地	古代・中世・近世	耕作地	範囲変更
② 422050	馬場古墳群	福岡町馬場	古墳	古墳	山林	範囲変更
③ 422051	加茂神社古墳群	福岡町加茂	古墳	古墳	山林	範囲変更
④ 422052	馬場東古跡	福岡町馬場	城館	中世	山林	範囲変更
⑤ 422053	鶴城跡	福岡町加茂・鳥倉	城館	中世	山林	範囲変更
⑥ 422054	加茂横穴墓群	福岡町加茂	横穴墓	古墳	山林	範囲変更
⑦ 422055	加茂遺跡	福岡町加茂	散布地	古代・中世・近世	耕作地	範囲変更
⑧ 422056	鳥倉遺跡	福岡町鳥倉	散布地	不明	耕作地	範囲変更
⑨ 422057	土屋古墳群	福岡町土屋	古墳	古墳	山林	範囲変更
⑩ 422058	下向田古墳群	福岡町下向田	古墳	古墳	山林	範囲変更
⑪ 422059	下向田遺跡	福岡町下向田・上向田・西明寺	散布地	古代・中世・近世	集落・耕作地	範囲変更
⑫ 422061	上向田古墳群	福岡町上向田	古墳	古墳	山林	範囲変更
⑬ 422062	上野北B遺跡	福岡町上野	散布地	縄文	耕作地	範囲変更
⑭ 422063	上野北A遺跡	福岡町上野	散布地	縄文	耕作地	範囲変更
⑮ 422064	上五位神社古墳群	福岡町上向田・上野	古墳	古墳	山林	範囲変更
⑯ 422065	平尻山古墳群	福岡町上向田・上野	古墳	古墳	山林	範囲変更
⑰ 422066	上野古墳群	福岡町上向田・上野	古墳	古墳	山林	範囲変更
⑱ 422067	上野B遺跡	福岡町上野	散布地	縄文	集落・耕作地	範囲変更
⑲ 422068	上野A遺跡	福岡町上野	集落	縄文・弥生・古代	集落・耕作地	範囲変更
⑳ 422069	上向田縄塚	福岡町上向田	縄塚	中世	山林	変更無し
㉑ 422070	上野西古墳群	福岡町上向田	古墳	古墳	山林	範囲変更
㉒ 422086	馬場西古跡	福岡町馬場	城館	中世	山林	範囲変更
㉓ 422100	伝雲龍寺跡	福岡町加茂	社寺	中世	山林	変更無し
㉔ 422108	三日市西遺跡	福岡町三日市	散布地	古代・中世・近世	耕作地	新規
㉕ 422109	加茂浅畠遺跡	福岡町加茂	散布地	古代	耕作地	新規
㉖ 422110	加茂ねらみ山古墳群	福岡町加茂	古墳	古墳	山林	新規
㉗ 422111	鳥倉御玉田遺跡	福岡町鳥倉	散布地	古代・中世・近世	耕作地	新規
㉘ 422112	下向田東遺跡	福岡町下向田	散布地	古代・中世・近世	耕作地	新規

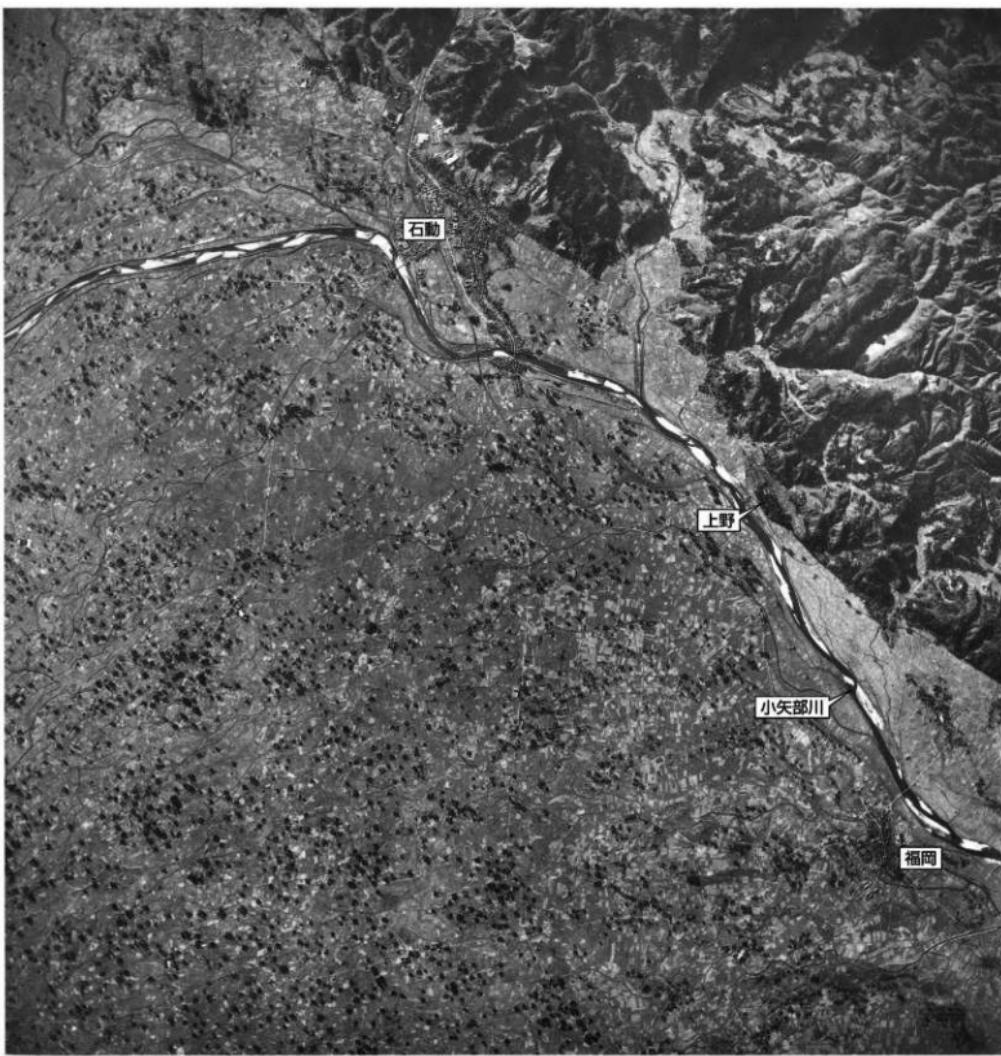
参考文献

- 久々 忠義 1992 「富山県福岡町上野A遺跡発掘調査概要」福岡町教育委員会
 栗山 雅夫 2003 「富山県福岡町上野A遺跡発掘調査報告Ⅱ」福岡町教育委員会
 栗山 雅夫 2003 「富山県福岡町埋蔵文化財分布調査報告Ⅰ」福岡町教育委員会
 栗山 雅夫 2004 「富山県福岡町埋蔵文化財分布調査報告Ⅱ」福岡町教育委員会
 高岡 繁樹 2003 「富山県福岡町中世城館調査報告書」福岡町教育委員会
 西井 雄儀 1967 「福岡町上向田縄塚について」「オジャラ」第2号 高岡工芸高校地理歴史クラブOB会
 福岡町史編纂委員会 1969 「福岡町史」福岡町役場
 宮田 進一 1985 「富山県福岡町下向田古墳群試掘調査概報」福岡町教育委員会

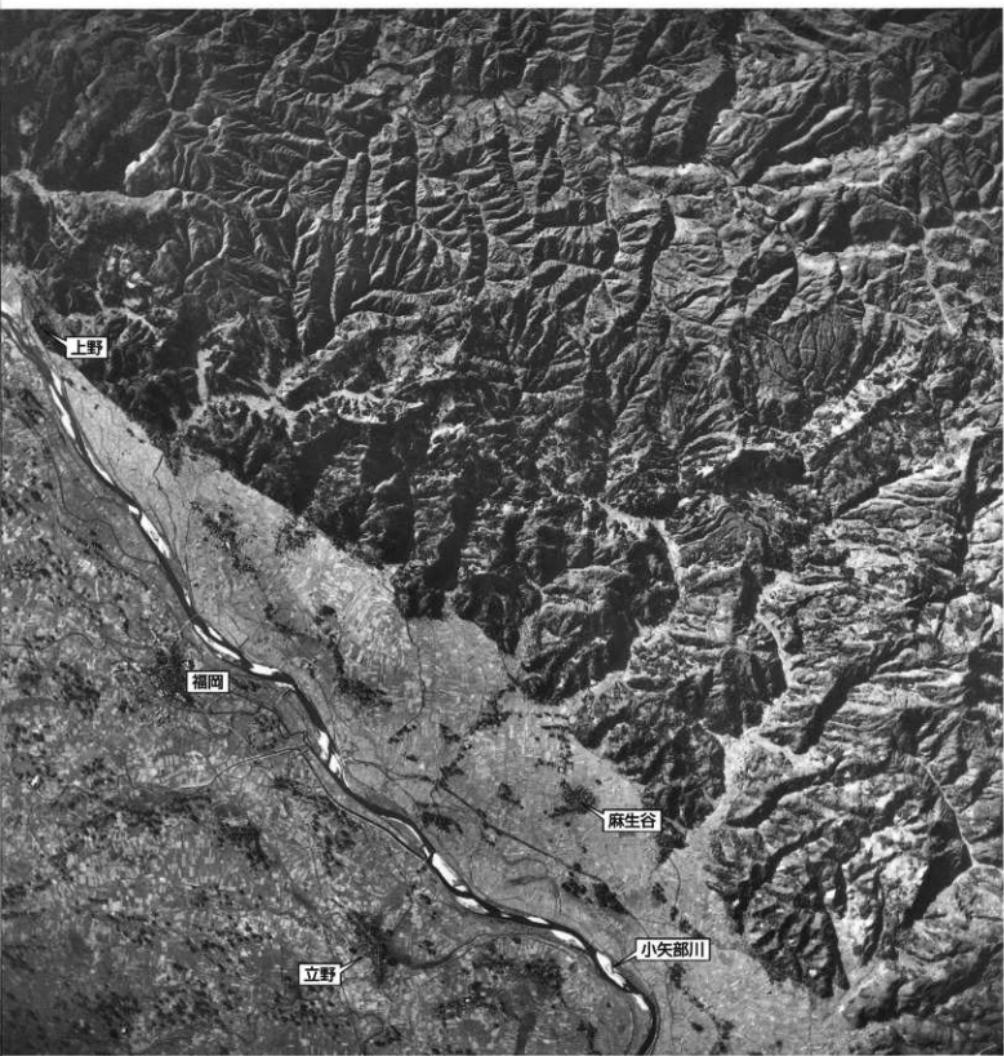
①	馬場遺跡
②	馬場古墳群
③	加茂神社古墳群
④	馬場東砦跡
⑤	鶴城跡
⑥	加茂横穴墓群
⑦	加茂遺跡
⑧	鳥倉遺跡
⑨	土屋古墳群
⑩	下向田古墳群
⑪	下向田遺跡
⑫	上向田古墳群
⑬	上野北B遺跡
⑭	上野北A遺跡
⑮	上五位神社古墳群
⑯	平尻山古墳群
⑰	上野古墳群
⑱	上野B遺跡
⑲	上野A遺跡
⑳	上向田経塚
㉑	上野西古墳群
㉒	馬場西砦跡
㉓	伝雲龍寺跡
㉔	三日市西遺跡
㉕	加茂浅畠遺跡
㉖	加茂ねらみ山古墳群
㉗	鳥倉御玉田遺跡
㉘	下向田東遺跡



第7図 2004年度分布調査成果図(1/10,000)



写真図版1 航空写真(1) ※1947年撮影 (小矢部—福岡)



写真図版2 航空写真(2) ※1947年撮影(福岡—高岡)



写真図版3 遺跡写真(1) 上段：馬場遺跡(西から) 下段：加茂遺跡(北西から)



写真図版4 遺跡写真(2) 上段：上野A・上野B遺跡(北から) 下段：下向田遺跡(北西から)

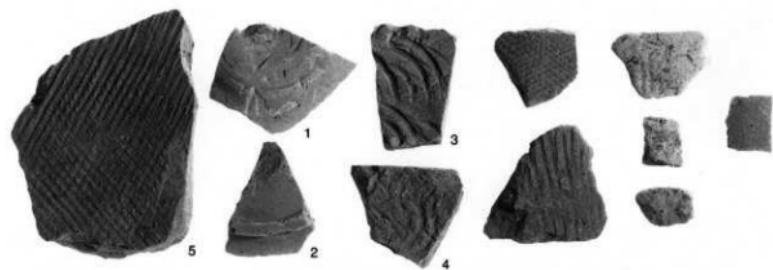


写真図版5 遺跡写真(3) 上段：三日市西遺跡（北から） 下段：加茂浅畠遺跡（北西から）



写真図版6 遺跡写真(4) 上段：鳥倉御玉田遺跡（南西から） 下段：下向田東遺跡（南から）

馬場遺跡



加茂遺跡



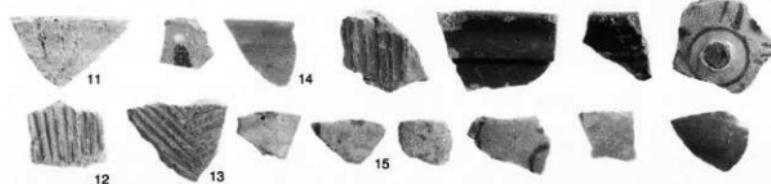
下向田遺跡



上野A遺跡



三日市西遺跡



写真図版7 表採遺物 俯瞰写真(1) ※縮尺約1/2

加茂浅畠遺跡



16



17



島倉御玉田遺跡



18



21



19



20



22

下向田東遺跡



24



25



26



23



27



報告書抄録

ふりがな	とやまけん ふくおかまち まいぞうぶんかざいぶんぶちょうさぼうこくさん							
書名	富山県福岡町埋蔵文化財分布調査報告Ⅲ							
シリーズ名	福岡町埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	15							
編著者名	栗山雅夫							
編集・発行機関	福岡町教育委員会							
所在地	〒939-0132 富山県西砺波郡福岡町大滝44番地 TEL0766-64-5333							
発行年月日	西暦2005年3月31日							
所 収 遺 跡	所在地		コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
	市町村	遺跡番号	市町村					
町内遺跡	福岡町地内	16422	—	36度 43分 00秒	136度 55分 00秒	20041209 20050331	—	—
所 収 遺 跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
町内遺跡	—	縄文時代 弥生時代 古代 中世 近世	—	縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、珠洲焼・中世土師器・瀬戸美濃・越前・青磁・鉄貨、越中瀬戸・肥前陶磁				

富山県 福岡町
埋蔵文化財分布調査報告Ⅲ

発行日 平成17年3月31日

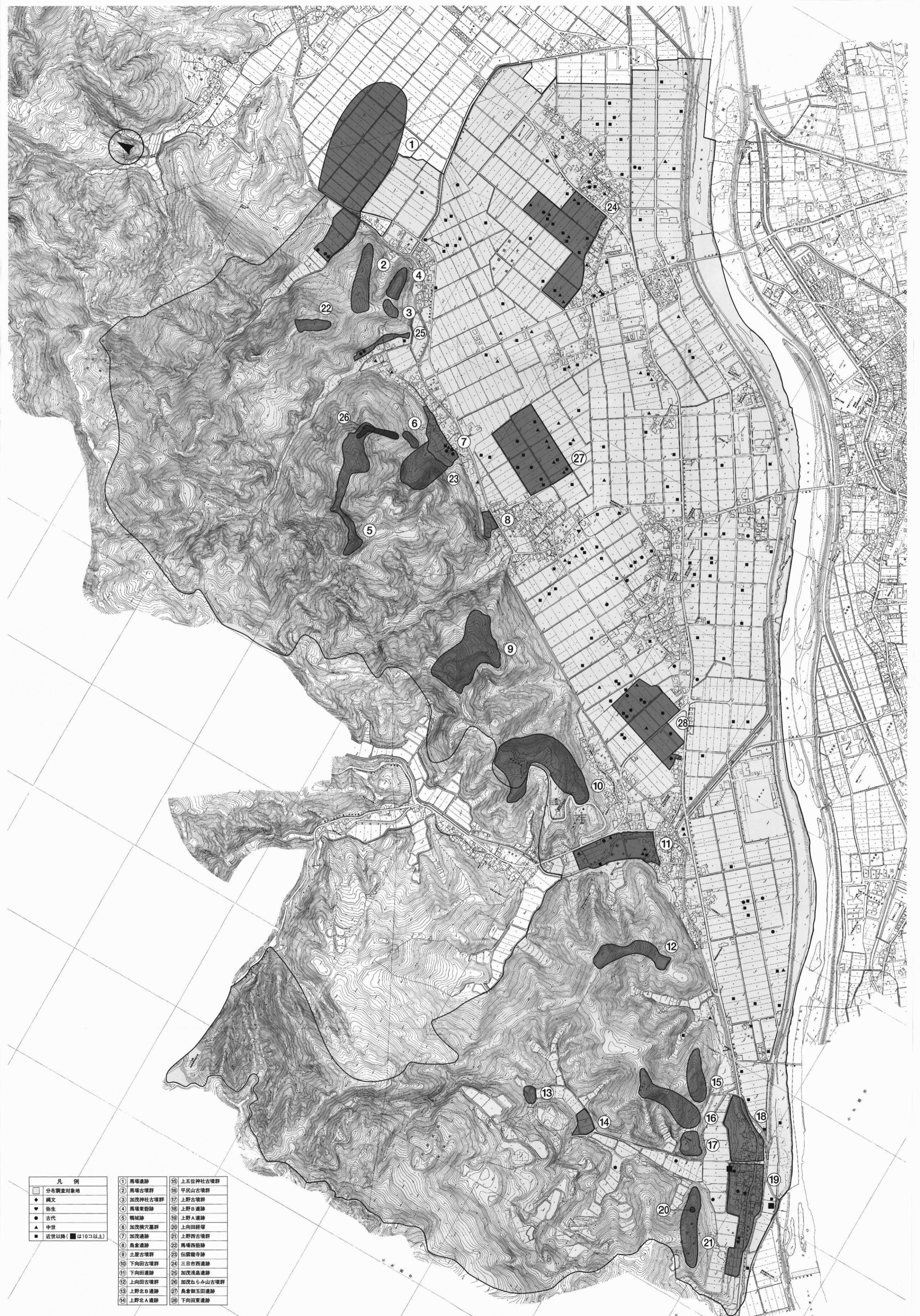
編集・発行 福岡町教育委員会

〒939-0132

富山県西砺波郡福岡町大字44番地

TEL.0766-64-5333

印 刷 ヨシダ印刷株式会社



付図 2004年度分布調査結果概要図(1/6,000)